

## 新シリーズ：シリアの牧畜社会の変容と資源管理

### 第1回：牧畜民の定住化

シリア北東部の牧畜民の本格的な定住化は1950年後半以降おこなわれた。それ以前においてジャジーラとも呼ばれるこの一帯は、ハブール川やトルコ国境近くの耕作地帯をのぞいて定住集落はごく限られた一部の土地で成立していたにすぎず、牧畜民が広範囲に遊動する放牧地であった。19世紀から20世紀初頭にかけて当該地域を訪れた欧州の旅行者たちは肥沃な大地が牧畜民に占有される様に一様な驚きを呈している。ところで、50年ほど前からの一連の定住化への流れは、国家政策による外部強制的なものというより、ジャジーラ平原で急速に進んだ農業開発と同時並行して牧畜民が自律的に近代農業をかかれらの生業に取り込む過程で生じたものと考えられている。しかし、定住家屋を築いて耕作を開始したところで、それは天水依存の原初的な農業形態であり、作付けも大麦主体で本業である牧畜の補助生産の域をでない。したがって、農耕地が拡大し相対的に草原面積が減少した環境下で、彼らが農業に手をつけたとは言え、農耕地と草原の往復などの積極的な季節遊動を継承し、仕切りなおしをして、新たな牧畜経営に適應していったという見方も成り立つであろう。

そもそも牧畜民とは、何だろうか？「動物の群れを管理し、その増殖を手伝い、その乳や肉を直接・間接に利用する生業の民」というのが一般的ないし原則的な類型としての定義となるが、現実の世界には多種多様な形態の牧畜が存在している。また近年の近代化の波及により、おなじ牧畜民であっても歴史過程で農耕や他の生業と複合化し、それらの組み合わせの比率からさらなるバリエーションが生みだされてきている。それは、生業様式として生活のすみずみにまで影響を及ぼす点で、先進国における産業としての「畜産」とも一線を画している。とまれシリアにおいて、都市居住者がしばしば牧畜民を指し示す「ベドゥ」という呼称には、砂漠の劣悪な生活への憐れみとも軽蔑とも解釈される語感とはうらはらに、自分たちでは生きていけない過酷な場所で生活を成立させる人々への畏怖が複雑に入り混じったまなざしとして受けとめられる。

これまで AAINews では、シリアに関する話題として、〈シリアの自然と農業〉、〈農業普及〉、〈園芸療法〉など何度か取りあげられてきている。新シリーズでは、シリア北東部、ハサケ県のジャジーラ平原のほぼ中央に位置するアブド・アルアジズ山地に居住するアラブ系牧畜民バグーラ族にスポットをあてる。そして、牧畜および天水農業など基軸となる生業活動およびその変遷を紹介しつつ、放牧地利用のありかたや現在彼らが直面している問題点について整理してみたい。とくに、アブド・アルアジズ山地の環境史に立脚しながら、草原生態系における資源管理という観点から乾燥地の環境利用に対して多角的な検討を加えていくつもりである。



バグーラ族とベート・シャル(黒ヤギの毛で編んだ天幕)



アブド・アルアジズ山地の遠望

## 第2回：バグーラ族とアブド・アルアジズ山地

牧畜民が日干し煉瓦の家を建て、ムギ類の機械化近代農業の生業への組み入れを契機としてアブドアルアジズ山地（以下、AA山地）における定住化の開始とすると、バグーラ族（以下、Baqqara）の定住化はわずか50年たらずの歴史でしかない。この歴史の浅さにくわえ、いまに至るまで完全定住型の生活様式に移行したとは言えず、家畜を引きつれた季節移住も活発におこなわれてきている。したがって、Baqqaraの現況としては、あくまで定住「化」であるが、この半世紀の月日の間には生活のいくつかの局面において顕著な変化があった。列挙すると、まず道路網が発達し、車やバスの使用が増えたこと。それにつれ、重要な移動・運搬手段であったラクダの相対的地位が低下し、ラクダを手放したこと。定住村に小学校が建設され子供の教育が充実したこと。市場へのアクセスが容易になったことから乳・乳製品の都市市場への出荷が増大したこと。食生活の面では、現金により購入した野菜類を食する機会が増えたこと、各世帯が家屋横のかまどで日常的にタンノール・パンを焼くようになったことなどがあげられる。さらに、このような外面的変化にとどまらず、もはや遊動的な生活様式の「ベドゥ」としての自負ではなく、むしろ定住者、都市居住者としての「ハダル」であるとの意識が強まってきている。しかし、都市部との大きな相違点は、いまも根強く保持している共通祖先の記憶を共有する部族への帰属意識や紐帯であろう。部族長の社会的リーダーとしての存在感はとみに薄れ、その政治的影響力は以前とくらべ相対的に弱まったとされるが、成員間の紛争解決などの際には隠然たる力を持ちつづけている。

Baqqaraは、19世紀にはユーフラテス川を拠点に、夏の河川水を利用したモロコシなど雑穀類の簡単な作付けと冬の放牧地とを往復する季節遊動を繰り返しながら、20世紀の初めまでに支流であるハブール川に沿って北上し、さらに土地利用権を広げていった。Baqqaraの分布範囲は、南はデリゾールから北はトルコ国境のラスアルアインまで、西はラッカから東はハブール川右岸にかけてである。現在のBaqqaraは約27支族に分節化しており、各支族長が並び立つが、大きくはBaqqara al zorとBaqqara al jabalの2つのグループにわかれている。Baqqara al zorは、デリゾール県のユーフラテス川沿岸からAA山地の南麓を主要な分布域としている。他方、Baqqara al jabalは、ハブール川上流部との往還によりAA山地およびそれ以北のハサケ県北部へと分布を拡大してきたグループである。活動域の拡大は、時には放牧地争いや他部族との抗争を生みつつも、次第に部族の領域を確定させていった。そして、機械化ムギ作の近代農業が普及する1950年代後半にはBaqqaraの各支族の部族民も世帯ごとに居住地を割りふられ定住化していった。その居住地周辺にたまたま山地があれば従来型の放牧中心の生業を維持し、たまたま川などがあれば、一部では積極的にコムギ、ワタの灌漑農業を導入し、家畜を手放して生業の鞍替えを図った。

牧畜を主たる生業とする部族の土地区分は、境界線が農耕地ほどはっきりしておらず曖昧である。しかし、放牧地を相互にオーバーラップさせながらも、支族単位の社会的分割による明確な土地区分が存在している。AA山地においては、Baqqara全27支族中5～6支族のBaqqara al jabalが各々の領域を住みわけている。次号では、筆者が1993～96年にかけて参与観察を実施した定住化過程のBaqqara al jabalに焦点を絞り、AA山地における土地利用について詳細をみていく。



日帰り放牧



村の水汲み場



日干し煉瓦定住家屋の補修

### 第3回：刈あとと耕地との組み合わせ放牧利用

ハサケ県における本格的な農業開発の歴史は非常に浅く、それ以前は牧畜民が利用する空間として、広大な放牧地がひろがっていたことはすでに述べた。また近年の牧畜民の定住化ないし農耕化はこの土地利用の変換過程で生じたことも言及したとおりである。ハサケ農業開発の特徴としては、もともと農民がほとんどいない地域で大規模におこなわれたこと、大型機械を所有するアレppoなど都市部の商業資本階層が農業を投資対象とするアグリビジネスをいっせいに展開させたこと、の二点であるとされている\*\*。

ハサケ農業開発は、第一段階としてコムギ、オオムギなどの穀物生産、つづく第二段階でワタの作付けへと進み、いまやハサケ県はシリアを代表する穀倉地帯であり、工芸作物の生産基地として地域ないしは国の経済発展におおきく貢献している。しかし、現代史におけるこうした土地利用ならびに居住環境の劇的改変のなかで、牧畜民は生態資源に対してどのように対処し適応していったのであろうか？そこでは、大部分の飼養家畜を手放して農業を主要な生業にするというのもひとつの選択肢であったであろうし、現実にそのような道を選んだ牧畜民も多数あった。しかし、アブドアルアジズ山地(以下、AA山地)に半定住集落を築いた Baqqara al Jabal は、かたわらで簡単な農業にたずさわりながらも、従来どおり季節移動をくりかえし家畜飼養を維持させるという歩みをとった。平原が農業開発されたことによる草原面積の減少、とくに夏の乾季の草資源不足をどうおぎなうか？これが当時 Baqqara al Jabal の直面した大きく深刻な課題であったことは容易に想像のつくところである。しかし、かれらにとってみれば、じつは開発されたムギ作の刈あとと地やワタの収穫残渣が新しい放牧資源としてすでに眼前に開かれていたことになる。このような新規飼料をかれらの牧畜へと積極的にかつ柔軟に導入したことで、草原から農耕地へというようなとりまく環境の質的かつ量的変化に対し、みごとな資源適応をとげて、伝統である移動的な生活様式を保ちつつ、それまで未利用・未開拓の資源をたくみにとりいれた新しい段階の牧畜経営へ移行していったことになる。

上記のように、Baqqara al Jabal は農業開発ひいては定住化の大きな時代潮流において、AA山地における季節移動放牧を基本に刈あとと耕地と組み合わせて、草資源の不足する夏から秋にかけて平原部へとでていく移動放牧パターンを形成した。ぎゃくに、平原部において大規模に家畜を所有する Baqqara al Jabal 以外の人々にとってもAA山地は春季の貴重な放牧用草資源としてスポットを浴びていくことになった。



大型コンバインによる  
オオムギの収穫風景



オオムギ畑の刈あとと耕地放牧



牧畜民青年の出稼ぎによる  
コムギ畑の灌漑作業

\* 牧畜民(遊牧民)の襲撃がくりかえされ、治安の悪化により村落の荒廃化ないし放棄化、いわゆる<bedouinization>が進行し、現在のハサケ県をふくむジャジーラにおいて定住人口が希薄となった時代は数世紀にわたって続いたという(Wolf-Dieter Hütteroth, 1992)。定住人口がふたたび増加に転ずるのは1950-60以降である。

\*\* たとえば、Amin.S., 1976を参照

## 第4回：規則的遊動パターンの成立と山地草原植生への人為圧

本シリーズでこれまでとくに説明をくわえずに「資源」という言葉を繰り返しかえし用いてきた。ここでいう資源が何をさしているのかをすこし明確にしておきたい。資源とは、まず住民共同体との濃密で直接的なやりとりを前提とした集落ないし活動域周辺における自然である。この自然は農耕や牧畜を営むうえで不可欠な基盤となる身近な土壌、水、草原、森などをさす。またときに生業の補助手段として、あるいは本業としての採集・狩猟(漁撈をふくむ)の対象ともなる。日本の農山魚村で生活の糧、すなわち生活資源として重要な役割を果たしてきた里山の自然もここでの資源という意味合いにちかい。当該住民にとってはこの自然は直接の生活資料となると同時に現金収入の限られたなかでの生活保障の役割を果たしてきたとみられる。他方、工業化による圧倒的な資金力、購買力を背景に地球規模で大量輸送、大量循環される石油、鉱物、エネルギー、飼料用穀物、食糧などの「資源」は一応次元の異なる事項として区別して取り扱うこととしたい。

前号でみたとおり、春季においてジャジーラに残された唯一まとまった草資源としてアブド・アルアジズ山地(以下、AA山地)の重要性が急速にクローズアップされてくることになった。ハサケ農業開発の動きのなかで牧畜民全体の関心が春季に不足する資源獲得という目的でいきなりAA山地に向かいだした格好である。ここに夏季～秋季の平原部利用と春季のAA山地利用とのあいだに新形式の季節往復移動が成立した(冬季は各集落周辺での利用が基本となる)。このように飼料資源の季節的・地域的な新たな偏在に対して、牧畜民はその柔軟性および進取性をいかに発揮して変容した環境へとしたたかに適応していった。そして、その気質を支えたのが彼らの遊動性ないし非定住性にあったと筆者は考えている。この稀少で偏在する乾燥地資源をめぐる牧畜民の適応戦略としての遊動文化についてはAAI News No. 45でふれておいた。

しかし、春季のAA山地への家畜群の集中化は、ひとまずいたずらに無制限・無軌道な利用にはいたらなかった。Baqqara al jabalの5～6支族単位による半定住集落の分布や支族間割り当てによる山地の使い分けという社会規範に由来する放牧地利用規制がはたらくことで外部牧畜民による遊動パターンについても一定の規則性を最初から有していたからである。また資源利用面からみるならば、AA山地において放牧だけでなく、もうひとつの利用圧力が草原に対して存在している。それは牧畜民がパン焼きのための燃料集めを草原植生の優占種であるshrub類におおきく依存し、薪採取圧というファクターがたえず草原に対してかかっていることによっている。さらに詳細にみていくと放牧地選択とならんで民族植物学的に興味ぶかい牧畜民によるshrub類の選びわけという現象が認められる。こうしてAA山地の草原植生は放牧と薪採取という2つの人為圧をたえず受けつづけながらも、支族間の社会経済的なすみわけや資源利用における嗜好性ないし選択性から、彼らの定住化の過程をとおして、非常に規則性をもった利用パターンができあがってきたとみられる。今回は、この方向性をもった人為圧によってだいに変化して成立したAA山地の配列的草原植生を紹介する。



山地草原からのshrub採取風景



ロバに薪を積みあげ家へと運ぶ  
牧畜民

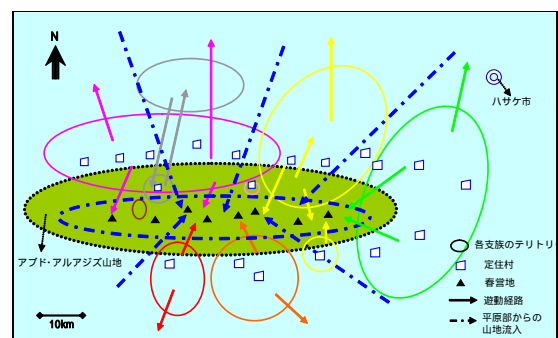


タンノールかまどで焼かれるパン

## 第5回：配列的な草原景観の形成

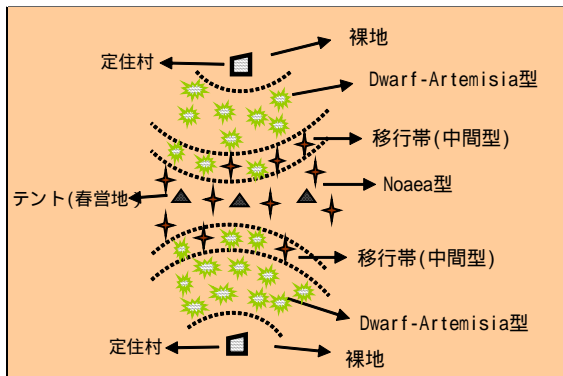
アブド・アルアジズ山地(以下、JAA)周辺には牧畜民の定住村が大小ふくめて 58 村存在している。しかし実際には牧畜民は家畜群をともなって季節遊動をくり返すので定住村とはいいながらも住民すべてが1年を通して1つの村に居住することはきわめてまれである。遊動距離は数十キロ程であるが、基本的に世帯別経営となるため、季節遊動により一部の住民が村からでていたり、逆によその村から別の牧畜民が入ってきたりする。JAA は晩秋ごろから人口ないし家畜頭数がだんだん増えていき春から麦収穫季までの3~5月にピークに達する。山地全域における春営地の立地調査をおこなったのは1996年春<sup>注</sup>である。遊動は広域にまたがり、さらに内部の微地形の影響をうけ、様相はなかなか複雑であり、限られた期間内で分散したかれらの遊動の実態をとらえるのにたいへん苦労した。当時はGPSの精度はさほど高くなかったが(誤差±100m)、パジェロでJAAを駆けまわり、一時的に流入した全466世帯の地理座標をくまなくおさえていった。あわせて、部族(支族)名、出身村、JAAの滞在期間、宿営歴、遊動の動機等の聞きとり調査をおこなった。

紙面の制約から調査結果の詳細は省かざるをえないが、JAAの宿営地は世帯ごとの個別のつきあい関係で自由に選択されつつも、支族間で配分・分割されたテリトリーにより調整され定められること、同じ場所を数年つづけて利用する傾向があることなどが明らかとなった。JAAにおける部族、氏族の分割テリトリーと遊動経路を模式図で示すと右の通りである。一点鎖線の楕円内で示された山地中央部(以下、中央部)には恒常的な水源が存在せず、定住村は存在していない。しかし冬から春にかけての降雨により形成される水たまりや給水車による水補給



遊動経路と各支族のテリトリー

で春営地が造営されるのは定住村周辺というよりむしろこの中央部である。遊動は、JAAの定住村からに加え、JAA外の平原部からの家畜群が加わる。また積極的に遊動をおこなうのが所有家畜頭数の比較的大きな世帯が中心になることから中央部は過放牧気味となり、植生が退行しアカザ科の *Noaea mucronata* が散在する景観が広がる。他方、山麓部に立地する定住村周辺では恒常的な放牧圧がかかるものの春の重点的な放牧は中央部への季節遊動により回避される傾向にあるので放牧に起因する退行は相対的に軽微なものとなる。この放牧利用とともに、前号で示した毎日のパン焼きを背景とする薪採取慣行が草原へのもうひとつの人為圧として加わる。薪の採取量の観点からみれば、短期的な利用の春営地近辺より定住村の周辺におけるほうが圧倒的におおきい。またこの採取圧からは、ある程度の放牧圧により矮生化した *Artemisia herba-alba* が薪として不適なことから選択的に残される。したがって



草原景観の帯状構造

定住村のまわりでは、人口、家畜頭数が適正であるならば、矮生化 *Artemisia herba-alba* が優占する Dwarf-Artemisia 型の草原が展開する結果となる。さらに定住村と春営地のあいだには漸移的な中間植生型が形成されるため、JAAの草原景観は北から南へ帯状配列していることがわかってきた。こうした人為的に改変された草原景観の成立背景には、定住化の流れのなかで次第に形成された部族(支族)のテリトリー分割、遊動経路、種選択的な草原利用など規則性の備わった牧畜民の環境利用方法がおおいに関与したとみている。

注：本調査は、ICARDA(国際乾燥地農業研究センター)-シリア国ハサケ農務局共同のJAA資源管理プロジェクト(1993-96年)において青年海外協力隊(JOCV)の一員として担当した牧畜民の環境利用に関する生態調査ないし社会経済調査の一環でおこなった。

## 第6回：将来の資源管理への展望

2002年シリアを5年半ぶりに再訪する機会を得て、アブド・アルアジズ山地（以下、JAA）を調査した。調査の目的は、住民であるバクガラ族（以下、Baqqara）の参加型村落開発の可能性を探ることにあつた。しかし、JAAの草原植生については、このシリーズで紹介してきたような配列的草原景観のおもかげはすでに消えており、さらなる植生変化を目の当たりにすることになった。1950年代末以降のBaqqaraを中心とした牧畜民の定住化の歩みとともに放牧や薪採取という人々の営みを大地に刻み込みつつ、40年余りの歳月をかけて少しずつ形作られてきたあの草原分布はみごとに破壊されていたのである。

近年JAAの草原が破壊された最大の理由は、山地周辺で1979年ごろより開始されて、じょじょにその区域をひろげてきた国による植林事業の展開にあつた。1990年後半以降、植林が加速度的に進行した結果、牧畜民の従来からの草原利用に大幅な変更が加えられ、利用範囲が手狭となった牧畜民が残された特定の放牧地への移動を余儀なくされた。もともとは社会的規範のなかで支族間による住みわけがなされていたが、放牧地利用の混雑による重なりあいから一部で過度な集中を招いてしまった。このような顕著な過放牧による草原植生の退行・劣化を引き起こす一方、植林による保護区に目を転ずると、植栽後の灌水などきめこまやかな管理がどうしても行き届かず、松やピスタチアなど植林樹木種がほぼ全滅にちかく枯死してしまっている。それまで牧畜民の里山として、その生活様式によって加えられていた山地植生への圧力がとりはらわれて、shrub類が雑草として繁茂することになった。このshrub類の過繁茂は樹木生育の阻害要因となるだけでなく、夏の乾季におけるたび重なる野火の発生など自然災害を生みやすい状況を生み出している。

結果として、JAAの草原は、過放牧と過繁茂との対照的で極端なふた通りの植生へと移行、分化してしまつた。いったい牧畜と植林というこの根本思想が相異なるかにみえる土地利用方式の両立はむずかしいのであろうか。今日のJAAの状況を見る限り、どちらの土地利用も成功しているとは言えず、どっちつかずの袋小路に陥っているようにおもわれる。ここに牧畜民が利用する空間のなかで、やや一方的に強行実施した乾燥地における植林活動の難しさを痛感させられるのである。また、50年まえの耕作地拡大による放牧地の減少化に対し、新たに資源適応しながらその困難を乗り越り牧畜を継続してきたBaqqaraにとつても、今回の植林による保護区拡大は牧畜という生業自体を維持していけるかどうかの大きな瀬戸際に立たされていると言える。かれらが定住村に住み続けながらあくまで牧畜をつづけていくとしたなら、もはや放牧ではなく、近隣農村部から農産物残渣等の補助飼料を入手しながらの、より集約的な家畜管理の方向性を探ることになるしか道は残されていないであろう。薪採取については、密なshrubの除草と位置づければ、植林と共存していくことは十分可能であると考えられる。一方、植林後の資源管理にとつても、このように住民をもうすこしうまく巻きこんで、相互協力体制を築いていくことが今後の切実な課題になるとおもわれる。しかし、さらにこういうことも言えるのではないだろうか。BaqqaraはJAAに長年住みつづけるなかでかれらの生活資源としての草原植生に対して豊富な知識や経験を蓄えてきた。だからこそ、前号でみたように、むやみやたらに植生を利用するのではなく、牧畜民として草原を選挙・評価した結果、ある種整然とした配列的草原植生景観が形成せられてきたのだと考えられる。われわれはしばしば資源管理と称して、衛星画像を処理することや、GISを活用しながらの植生図など資源図作成を想起する。これを資源管理の外からの眼とするなら、他方で住民による内からの眼を取り入れて、両者を結合させて複眼の資源管理としてみていくことが地域植生をより深く理解するうえで重要な課題になってくるのではないか。将来、再びわたしがJAAにはいつて活動する機会があるならば、牧畜民の草原植生に対する内なるまなざし、すなわちかれらの民族植物学的視座を加味した資源管理のスタイルで望みたいと考えている。



1990年代半ばの草原植生の状態



過放牧により枯死した  
*Artemisia herba-alba*



植林保護区：植栽されて6年目の  
*Pinus* spp.と過繁茂のshrub類